

新機軸の演奏会から考える オーケストラの歴史③

木々の間に、羊や馬や牛といった動物の姿が見える…。長閑な自然の風景のように思えるかもしれないが、そうではない。実はオーケストラの楽器の話。

考えてみれば当然だろう。たとえば弦楽器の胴体は、木材で作られている。さらに弓は馬の尻尾、また昔であれば弦は羊の腸が材料だった。そもそも弦楽器の代表格ともいえるヴァイオリン自体、元々は山に住む木こりが奏でるためのものだったほど。あ

るいは木管楽器。元々は動物の骨で作られていた笛が進化を遂げた後も、そこには木材をはじめとする自然素材が使われた。

いっぽう、銅を用いて作られる金管楽器はたしかに人工的と言えるかもしれない。それでも、たとえばホルンは狩猟に用いられるものだった。ティンパニの皮も、時には猟によって仕留めたであろう動物の皮を使っている。

といった具合に、オーケストラはいわば自然を凝縮した存在だった。またそれゆえに、オーケストラが活動する場所は室内のみにとどまらず、野外にも及んでゆく。いや、むしろ天候のよい夏などは、公園や庭園を始めとする野外での演奏会のほうが盛んだったほど。

こうした状況が急激に変化を遂げてゆくのが、19世紀。科学や技術の発達を通じ、人間が自然を征服できる、という考え方が強まって以降である。例えば弦楽器1つをとっても、音量を大きく音色を華やかにさせるべく、弦には羊の腸のかわりに金属が用いられるようになった。木管楽器も金属製のキーに覆われるようになり、フルートに至ってはもはや楽器自体が木製ではなく金属製に取って代わってゆく。そしてオーケストラの演奏会も、それ専用で作られた人工のコンサートホールで催されることが多くなっていった。

だが昨年来のコロナ禍で、このような19世紀以来の演奏会のあり方が、突然の曲がり角を迎えている。またそのような中だからこそ、オーケストラと自然との関係についてあらためて考え直してみるのもよい機会ではないか。オーケストラと盆栽という意外な両者が結びつく今回の演奏会などは、その1つの表れといえるだろう。



ウィーンのフォルクスガーデンにおける夏の夕べの
野外演奏会（1845年）360°ステージが見える。